

A 語句の意味と読み

(1) いう /語中・語末の八行「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す

(2) いろいろ。さまざま。(あとに「こと」が続いて「いろいろなこと」の意) /漢字では「万」。ここは「いろいろなことに使っていた」の意

(3) つかいけり /①と同じきまり。語中・語末の「ひ」は「い」に直す。語頭の八行はそのまま

(4) 不思議に思っ。 /★現代語の「怪しい(うさんくさい)」ではない。動詞「あやしがる」+接続助詞「て」

(5) 「〜ほど・〜くらい」。だいたいの程度を表す。 /限定の「〜だけ」ではない。三寸は約九センチ(一寸は約三センチ)

(6) かわいらしい。いとしい。 /★現代語の「美しい(きれい)」ではない。小さいものをいつくしむ気持ちを表す

(7) 意味=座っている。じっとしている。 /現代仮名遣い=いたり /ワ行上一段動詞「ゐる」。「ゐ」は現代仮名遣いで「い」と書く

(8) もとの形=うつくしく(形容詞「うつくし」の連用形。「うつくしくて」の形) /変化の名=ウ音便 /「く」が「う」に変わる。現代仮名遣いでは「うつくしゅうて」と書く

B 文法

(9) 係助詞=なむ(強意) /結び=「ける」(過去の助動詞「けり」の連体形)。もう一か所=「その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。」(この文でも係助詞「なむ」の結びが連体形「ける」になっている) /ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形。「なむ」の強意は訳に出さなくてよい

(10) 存続(〜ている)。「光っている」の意。完了(〜た)と説明する教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせること。 /「たり」=完了・存続。ここは今まさに光っている状態なので存続でとるのがふつう

(11) 断定の助動詞「なり」の連体形「なる」が撥音便で「なん」となり、その「ん」が表記されない形+推定(婉曲)の助動詞「めり」。「〜であるようだ」の意。 /★「なんめり」と発音する。「べかめり」「ざめり」も同じ仕組み

(12) 完了の助動詞「ぬ」の終止形。「〜てしまった・〜た」の意。 /★打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」とまざらわしい。打消なら未然形に付いて「来(こ)ぬ」となる。ここは連用形「来(ぎ)」に付いているので完了

(13) 「ぬれ」=完了の助動詞「ぬ」の已然形。已然形+接続助詞「ば」で順接の確定条件(〜ので・〜と)を表す。 /★未然形+「ば」なら仮定条件(もし〜ならば)。已然形か未然形かが見分けの決め手

(14) どちらも使役の助動詞(「す」「さす」)。「養はす」=(姫に)養わせる、「つけさす」=(秋田に)名をつけさせる、の意。 /四段・ナ変・ラ変には「す」、それ以外の活用には「さす」が付く。「養ふ」は四段、「つく」は下二段。「す・さす」は尊敬になることもあるが、ここはどちらも人にさせているので使役

C 主語・指す内容・敬意の方向

(15) 尊敬語(「あり・をり」の尊敬語で「いらっしゃる」の意)。翁の会話文の中の敬語なので、話し手である翁から、竹の中にいる子(のちのかぐや姫)への敬意。 /★会話文(「」)の中の敬語は話し手からの敬意、地の文なら作者からの敬意になる

(16) 尊敬語(〜なさる・お〜になる)。⑨と同じく翁の会話文の中なので、翁から、子になるはずの人(竹の中にいた子=のちのかぐや姫)への敬意。 /翁が敬語を使っていること自体が、この子をただ者ではないと見ている証拠になる

(17) 竹取の翁。 /直前の「手にうち入れて」から続いている。子を手のひらに入れて家へ持ち帰ったのは翁

D 口語訳

(18) (その翁の)名前を、さぬきのみやつこといった。 /「なむ…ける」は強意の係り結び。強意は訳に出さなくてよい

(19) たいそうかわいらしい様子で座っていた。 /「いと」=たいそう、「うつくし」=かわいらしい、「ゐる」=座る。三語とも訳し方が決まっている

(20) (私の)子におなりになるはずの人であるようだ。 /「べし」は当然(〜はずだ)、「給ふ」は尊敬なので「おなりになる」、「なめり」は「〜であるようだ」

(21) この子がたいそう大きくなったので。 /已然形+「ば」なので「〜ので」。「もし大きくなったら」と仮定に訳するのは誤り

E 内容・記述

(22) いつも取っている竹の中に、根もとの光っている竹が一本あったこと。／直前の「その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける」がそのまま根拠になる

(23) 竹の筒の中に座っていた、三寸ほどのたいそうかわいらしい人（のちのかぐや姫）。／続く「それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり」が答えになる

(24) 自分が毎朝毎晩見ている竹の中にこの子がいらしゃったので、自分に授けられた、子になるはずの人だと思ったから。／「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ」がそのまま理由になる

(25) この子がたいそう大きく成長したので、翁が「みむろとのいむべの秋田」という人と呼んで名をつけさせ、その秋田が「なよ竹のかぐや姫」と名づけた。／「なよ竹」＝細くしなやかな竹。竹から生まれたことにちなむ。／★名づけたのは翁ではなく秋田。ここを取りちがえる答案が多い

F 文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 平安時代の初めごろ（九世紀末から十世紀初めごろ）に成立したとされる。作者は未詳。かな（仮名）で書かれた、現存する日本最古の物語（作り物語）である。／「最古の物語＝竹取物語」「最古のかな日記＝土佐日記」をセットで覚える

(27) 物語というものが生まれた最初のもの、物語文学の元祖である、という意味。／『源氏物語』絵合（ゑあはせ）の巻にある言葉。文学史の記述問題でよく問われる

(28) 美しく成長したかぐや姫に五人の貴公子が求婚し、さらに帝も心を寄せるが、姫はどれにも従わず、八月十五夜に月の世界から迎えが来て天に昇っていく。／「おひたち」はその出発点。昇天の場面は別の教材としてよく出る

【現代語訳（全文）】

今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。野山に分け入って竹を取っては、いろいろなことに使っていた。名前を、さぬきのみやつこといった。その竹の中に、根もとの光る竹が一本あった。（翁は）不思議に思って、近寄って見ると、竹の筒の中が光っている。それを見ると、三寸ほどの（大きさの）人が、たいそうかわいらしい様子で座っていた。

翁が言うことには、「私が毎朝毎晩見る竹の中にいらしゃることで、（この子のことが）わかった。私の子におなりになるはずの人であるようだ。」と言って、（その子を）手のひらに入れて、家へ持って帰った。妻の姫に預けて養わせる。

この子は、養っているうちに、ぐんぐんと大きくなってゆく。……この子がたいそう大きくなったので、名前を、みむろとのいむべの秋田と呼んでつけさせる。秋田は、なよ竹のかぐや姫と名づけた。